

政府」に従属しなければならない。そうなったとき、ソヴェトの自治的現実の何が残るか。おそらくソヴェトにも「特殊の中央集権主義」が是認されることになるであろう。ソヴェトの「生産部門別統括」やその「集中化」にたいしてボルシェヴィキは誰一人反対しなかった。しかしこのような「統括」は、それが自発的に下から上に向って行われ、本来は統括ではなくて結合であり、中央集権主義的過程ではなくて連合主義的過程であるときにのみ、社会主義的な、また社会建設的な性格をもつことなど、レーニンは明らかに感知していない。

権力掌握から十日後の「人民へ」というレーニンの呼びかけではこういつている。「こんど諸君のソヴェトは国家権力の機関、全権を与えられた決議機関である。」ところがそれから間もなくしてソヴェトにあてがわれた任務は主として管理ゴントロルに関するものである。このこと自体は状況によることであつた。しかしその権限はあまりに僅かであり、積極的な対重たるには欠けていた。このようにわずかな権限では、ソヴェトは「その素質と能力を十分に發揮」しうるには足らなかった。たしかにわれわれは、一九一八年三月の党大会でレーニンが、「官僚制なく警察なく、常備軍なき」新国家についての考えをくりかえし述べているのを聞くけれども、彼はなおこうつけ加えている。「ロシアでそれはほとんどはじまればかりであり、しかも下手にはじまったのだ。」その責任が十分な計画の不十分な実施にあると考えるのは、大きな誤りであろう。計画自体が生きた実質を欠いていた。「わがソヴェトには」と彼は説明している、「な

お多くの粗雑なもの、不完全なものが存在している。」しかし本当に重大なまた運命的でもあつた事柄は、たんに政治的であるだけでなくさらに精神的でもある指導が、ソヴェトに発展と完成とへの方向をさし示さなかつたことである。「コミニオンをつくった当の同じ人びとが」とレーニンはつづける、「コミニオンを理解していなかつた。」これは、ロシア帰国の翌日彼が、「われわれはソヴェトを理解していなかつた」といったことを想い起させる。だが彼はいまもソヴェトを本当には「理解し」なかつたし、また理解しようともしなかつたといつた方が真実である。

同じ演説でレーニンは、綱領に社会主義的秩序の特性に関する説明を加えようというブハーリンの要求に答えてこう言明している。「われわれは社会主義の特性など言明することはできない。社会主義が、その究極の形態をとるとき、どのようなものになるか、われわれはそれを知らないし、また語ることもできない。」これは疑もなくマルクス主義的な考え方である。だがまさしくここに、現に生成しつつある、もしくは生成しようとしている現実にたいするマルクス主義的世界観の限界が、歴史的な明白さにおいて示されている。すなわち潜在的な物事、それが発展するためには社会的形態観念からの促進を必要とするところの物事が知られていないのである。われわれはもちろん社会主義がどのようなものになるかを「知る」ことなどできない。しかし社会主義がどのようなものになることをわれわれが欲しているかは知ることができる。

そしてこのような知識、このような意志、このような意識的意志はそれ自体同時に生成に影響する。——人が中央集権主義者であれば、その中央集権主義が同時に生成に影響する。歴史のうちには、その勢力関係は異なるにせよ、つねに中央集権主義的發展傾向と地方分権主義的發展傾向とが並存している。そこに生ずる結果にとって本質的に重要なことは、意識的意志がその時々獲得した力をもって、これら二つの傾向のいずれに味方するかを宣明することである。

——そして権力を与えられた意志が中央集権主義から解放されること以上に困難な、また稀有なことはおそらくあるまい。中央集権主義的意志が、みずから利用する社会的構成体のうちに潜在するところの地方分権主義的諸要素を認めまいとすること以上に当然な、また論理的なことがあろうか。「社会主義を建設する煉瓦はまだつくられていない」とレーニンはいっている。レーニンは、その中央集権主義の故に、ソヴェトがその煉瓦であることを知りまた認めることができなかつた。彼はソヴェトがそうなるように助成できなかったし、また現にソヴェトはそうならなかつたのである。

党大会後間もなくしてレーニンは『ソヴェト権力の即時的任務に関するテーゼ』の最初の草稿の決定版には含まれていない箇所でこう述べた。「われわれは民主主義的中央集権主義に賛成する。……中央集権主義の反対者たちはつねに中央集権主義の危険にたいする闘争手段として自治と連合とを指摘する。実際には民主主義的中央集権主義は決して自治を排斥するもので

なく、むしろその必要を前提としている。実際にはさらに連合（レーニンは国家政治的連合だけを念頭においている）さえも決して民主主義的中央集権主義に矛盾しない。連合は、真に民主主義的な秩序においては、またソヴェト原理による国家建設においては、たんに真に民主主義的な中央集権主義への過渡的な一歩にすぎない。」レーニンが、連合主義の原則によって中央集権主義の原則を制限することなど少しも考えなかつたことがこれでわかる。彼はその革命家的見地から、連合主義的現実が中央集権主義のうちに解消されるまでの間、それを容認するにすぎない。思想の方向、行動の方針は異論の余地なく中央集権主義的である。また地方自治にたいしても本質的にはこれと異なるならぬ。ある程度の地方自治を許し、それにその協議事項を指示することは当をえているが、ただそれ自体の決定と中央の指示とがはじまる処に限界が引かれなければならない。これら民衆的および社会的構成体はすべてただ政治的、戦術的、戦術的および暫時的な有効性をもつにすぎない。どれ一つとして真の存在権、独立の構造的価値を与えられていない。どれ一つとして生成される自治共同体の生きた分肢として、また追求する未来のために保存され育成されることになっていない。

レーニンがその草案を口授してから一ヶ月のち「左翼共産主義者たち」は、国家行政の形態が官僚制的中央集権化、地方ソヴェトの独立性の廃止、下から自らを治めるコミューン国家の型——レーニンがその演説でソヴェト権力がまさにそれであるといったところの型——の放

棄の方向に発展しつつあることが、社会主義の芽生えにとって、いかに有害であるかを指摘した。当時の事態と発展の傾向との判断において、レーニンとその批判者のどちらが正しかったか、今日もはや疑問の余地はない。レーニン自身もまた晩年にはそれを知っていた。この演説の後にはパリ・コミューンにふれることはだんだん少なくなり、ついには全くふれなくなった。

十月革命から一年後にレーニンは、「官僚制機構がロシアでは完全に粉碎された」と言明した。ところが一九二〇年末には、彼はソヴェト共和国を「官僚制の瘤をもった労働者国家」と特徴づけ、それを過渡期の現実と見た。その後の年月の間に、瘤とそれが生じた幹との割合はいよいよ具合の悪いものとなり、過渡期がそれに向って完成されるはずの状態への芽生えがいよいよ少なくなったことは、レーニンにおおいかくされたままであることはできなかった。一九二二年末、第四回コミニスト・インターナショナル大会で行った報告『ロシア革命の五ヶ年と世界革命の展望』で、レーニンは率直に「われわれは古い国家装置を引きついだ」といっている。彼は数年にしてこの装置を根底から変えることに成功するであろうという確信をもって自分を慰めている。このレーニンの希望は実現されなかったし、またレーニンの前提からすれば実現さるべくもなかったであろう。彼は主として新しい力の養成と結集とを考えていた。しかし問題は構造上のものであって、人間の問題ではなかった。——官僚制はその名称が変わっても変るものではない。そしてソヴェトの学校や労働者学部で最高の教育を受けた卒業生も、官

僚制の雰囲気には抵抗できない。

レーニンの真の幻滅は官僚制の不変な存続であった。官僚制は、人員においてはそうでないにしても、その頑強かつ客観的な活動力においては革命原理よりも強力であることが再び立証された。彼はこの現象のより深い原因にはふれていないようである。十月革命は、社会秩序および社会成層、社会形態および制度に決定的な変化を実現したという意味でのみ、社会革命であった。しかし真の社会革命はそれだけでなく、さらに国家に対抗して社会の権利を確立しなければならぬ。この課題についてレーニンはたしかに、国家の死滅は時間的に全く測り知られない、その過程も全く予想されない発展において達成されることを指摘した。しかし彼は現在すでに実現することのできる発展の程度に依じて、この課題が指導の直接の行動綱領にとって決定的なものと認め、同時にその実現にただちに着手すべき新しい国家形態を「コミューン国家」と名づけた。しかし「コミューン国家」はマルクスによって、政治的原理の枷からの可能な限り広範囲な経済社会の解放として、十分明白に特色づけられている。「コミューンの秩序」とマルクスは書いた、「ひとたびパリおよび第二級の各中心地に導入されるやいなや、古い中央集権政府は地方においてもまた生産者の自治に譲歩せざるをえなかったであろう。」サン・シモンからプルドンにいたるフランスの社会思想によって理念的に基礎づけられかつ大成されたところの、政治的原理から社会的原理への決定権力の移行は、レーニンによっても指

った。「プロレタリアートの独裁」は事実上社会にたいする国家の独裁、依然この方途に社会革命の完成を期待する圧倒的多数の人民が賛成もしくは甘受するところの独裁である。レーニンにとってまさに廃止することが問題であったために、彼の悩みであった官僚主義——「コミューン国家」は彼にとって全く非官僚制国家であった——は、政治的原理の独占的支配に必然的に伴う現象でしかないのである。

この政治的原理の独占的支配を打破しようとする企てが党の内部で再三行われたことは注目に値する。そのうち、工業労働者自身のなかから発生したという理由で、最も興味深いのは一九二一年三月の「労働者反対派」である。これは、共和国の全国民経済の管理に当る中央機関を、労働組合に結成された生産者によって、選任することを主張した。これは決して生産者の自治を意味するものでなかったし、また真の分権主義的性格をも欠いていたとはいえず、生産者自治への重要な一步であった。レーニンはこれをアナルコ・サンジカリスト的偏向として排斥したが、その根拠は、マルクス主義者にとって生産者の団結は、生産者としての労働者のみから成る無階級社会においてはじめて考慮されることであって、現在のロシアでは、資本主義時代の残存物は別としても、なお二つの階級すなわち農民階級と労働者階級とが残存することにあった。したがって完成した共産主義がすべての農民を労働者に変えてしまわない間は、レーニンの意見によると、経済の自治など考慮されないわけである。言葉をかえていえば、共産主

導の組織的活動における本質的な方針であると声明されたが、実際にはそうした方針とはならなかった。政治的原理が形を変えて次第に新たに確立され、また革命の現実の危険はそれを大いに正当づけた。当時の事態からすれば、政治的原理を根本的に撤廃することなどに着手しえなかったことには異論の余地がないかも知れない。しかしそれにしても、たえず事態の変化に応じ、時々許された程度において、社会的原理の勢力範囲を拡大する方針を実際に立てるとは可能であった。起ったことはまさにその逆である。政治的原理の代表者たち、すなわち主として支配の地位についた「職業的革命家たち」は、彼らの無制限な決定領域を猜忌の念をもって保持した。なるほど彼らは人民のなかから有能な人びとを選抜してその隊伍を増強し、時々生ずる間隙をみだしはした。しかし指導的地位にとりたてられた人びとはまさにその精神の奥底までも政治的原理の烙印を押されていた。彼らは国家的実質の要素となり、社会的実質の要素ではなくなった。そして、このような変化に反対な者もその考えを主張することができないか、あるいは主張しようとしなくなった。社会的原理の力は發展することを許されなかった。革命の前にまた革命の最中に自発的に生じた「生産者自治」の芽生え、とりわけ地方ソヴェトは、表面的な表現および決定の自由にもかかわらず、中央の教義と意志に順応するようあらからさまざまもしくは暗に強制する様々の方法をもって万事をやりとげずにはいない党支配のために弱められ、ついにはソヴェトを生んだかの「民衆の創造力」の爆發など大して残らなくな

義の完成は国家死滅の達成と合致するのであるから) 国家の内部的権力領域の原則的縮少は、国家が最後の息をひきとる前には考えられえないことになる。このパドックスこそは、ソヴェト制度の指導における実際の行動原則である。この点から見るときはじめて、協同組合制度にたいするレーニンの態度の変化が全体として理解されるのである。

このさいもろもろの矛盾を批判的に指摘することは問題でない。レーニン自身一九一八年にすでに、新しい階級が社会の指導者として歴史の舞台に登場するときにはつねに、新しい客観的事態に対応する新しい方法の選択についての実験と動揺の時期をまぬがれないことを強調したのは誤りでない。それから三年後に彼はさらに「革命の歴史においていつもそうであるように、その動きがジグザグに進んでいること」が明らかになったと報告した。こうしたことはすべて政治革命にはあてはまるかも知れないが、しかし歴史上初めてかくも大規模に社会的変革の要素がつけ加わったときには、人類すなわち事件の当事的たる国民とともにその目撃者たる諸国民が、あらゆる実験と動揺のうちにも未来の明らかな告知を、社会主義的現存すなわち自由な共同社会への動きについての明らかな告知を知ろうと渴望するものであることを彼は見落した。ロシア革命においては、他にかつて未聞の何事が起ったにしても、この種のことは出現しなかった。そしてさらに協同組合にたいするレーニンの態度の変化は、そうした動きが起らなかったことの証左である。

革命前の時代には、協同組合はレーニンにとってたんにブルジョア社会の内部に存在する「憐れな姑息手段」であり、また小ブルジョア精神の支持者でしかなかった。十月革命の一月月前ロシアを襲った大経済危機に直面した彼は、ただちに採用すべき「革命的民主的」方策の一つとして、全国民を消費協同組合に強制的に結成することを主張した。その翌年の一月彼は布告の草案にこう書いた。「市民はすべて地域の消費協同組合に所属しなければならない。」また「現在の消費協同組合は国有化されることになる。」党の多くの方面でこの要求は協同組合の排除を目ざすものと理解されまたは認められた。それというのは、あるボルシェヴィスト理論家が疑もなく正当にいったように、彼らは自発的加入という要素に協同組合の必然的標識を認めていたからである。レーニンはそのように理解されることを欲しなかった。なるほど資本主義社会における小島のような協同組合は、彼がいうように「一店舗」たるにすぎないけれども、私的資本が廃止されたのち、社会全体を包括する協同組合は「社会主義」であり、したがってすべての市民を例外なく全般的な国营協同組合、「単一の大協同組合」の組合員たらしめることが、ソヴェト権力の任務だからである。だがそれによって協同組合の原理が一切の独立した内容とさらに原理としての存在性をも失い、無意味なものとした名称の下に必然的に中央集権的官僚主義的な国家制度以外に何も残らなくなることにについては全く語らなかつた。この綱領の実施はその後数年にわたって行われた。すべての協同組合が消費協同組合の指導の下に併合され、

消費協同組合は全く国営物資配給所に変えられた。レーニンは『ソヴェト権力の任務』を書いてから二年経った当時でさえ、すぐに国営化に進もうとはしなかった。彼は、国営組織の単一な網をもって断然協同組合にとって代らせようとする人びとを非難した。「それは全く結構なことかも知れないが、不可能だ」と彼はいったが、それは「現在では不可能」という意味であった。だが同時に彼は原理的には協同組合自体の観念を固く把持していたが、その協同組合というものは、彼がマルクスを想起し、また資本家収用の後に可能となる協同組合の社会的な作用を力説した、インターナショナルのペンハーゲン大会（一九二〇年）における彼自身の態度をも回想して言明したように、新しい経済秩序を建設する手段となりうるものとされている。問題は、「プロレタリア独裁の経済的および政治的諸関係に対応し」、また「真の社会主義的中央集権主義への移行を容易にする」ところの新しい協同組合の形態を見出すことである。その本質全体からして社会的分散化の胚種であり核心であるところの制度が、それと同時に、「社会主義的」と銘うつ新しい隙間のない国家中央集権主義建設の要素たるべきものとされた。そのさいレーニンが、理論的前提からではなく、実際的要求から出発していることは明白であって、その実際的要求は周知のようにきわめて重大なものであり、またそれは非常な努力を必要とした。レーニンが、もちろんその意味は全く逆のものに歪めてはいるけれども、「ユートピスト」や「アナキスト」たちの要請を想起させるような定式で、生産協同組合と消費協同組合とを結合すべきことを求めたとき、彼は生産高を高める必要からそうしたのであった。二ヶ年の経験でこの手段が目的に合うことがわかったからである。ところがそれから一年後には再びわれわれは、レーニンが古い、まだ克服されていない形のままで、「反革命的心情のとりで」となっている協同組合をばげしく非難するのを聞くのである。一九二一年春の有名な現物課税論でレーニンは小生産者の協同組合を含む危険、すなわちそれが不可避免的に小ブルジョア資本主義を強化することを強く指摘し、つづけてこういつている。「協同組合の自由および権利は、ロシアの現在の諸関係の下では資本主義のための自由と権利とを意味する。この明白な真実にわれわれの眼をふさぐことは愚かであり、犯罪でさえあらう。」そしてさらに、「ソヴェト権力の下では協同組合資本主義は、私的資本主義とはちがって、国家資本主義の一変種をつくり出し、かかるものとして一時はわれわれに有利であり有益である。……われわれは資本主義の発展を協同組合の河床に導きいれるように努力しなければならない。」この警告と指摘はただ、誤って「戦時共産主義」とよばれた年月には（レーニン自身一九二二年十月に、「われわれが共産主義的生産および分配へ直ちに移行することに決定した」ことから犯した失策をふりかえって語った）、実践上の方針であったことを語っているにすぎない。

しかし極度の中央集権化から生じた具合の悪い作用の結果として、また当時着手されたばかりの「新経済政策」に関連して、ここでもまた逆行的な傾向が勢力をのびはじめていた。レ

レーニンの警告的演説の二日前に、経済組織としての種々の協同組合、すなわち消費協同組合、農業協同組合および工業協同組合の再建についての法令が公布された。ついで二ヶ月後に出た法令によって、前からとりきめられていたところの、すべての協同組合の消費協同組合連合会(Zenitsovskis)への全般的解消がはじめられた。この年の末にこの連合会の会長は、協同組合の現状と任務とについてのある演説で、一定の計画にしたがって活動する国营協同組合機構が「官僚制的、非弾力的、固定的」になるのは当然のことにすぎないと声明し、また「協同組合を国家への隷属から解放しなければならぬ」と語る「声のあることを述べ、さらに「そうした解放を口にしなければならぬ」時期のあったことを認めた。事実人びとはしばしばこの強制組織を奴隷制にくらべた。当時農業協同組合についてその筋から説明されたように、いまやその事業にたいする当局の干渉は、「完全かつ無制限」に放棄され、「経済的發展をとおして協同組合を左右し規制するより多くの可能性」が国家資本主義の体制内で開かれることをもって満足し、結局これに適應することのできない、もしくはそれを欲しない組合は「磨り潰され、廃止され」るにいたった。信頼できる党員が中央ならびに個々の組合の指導部にはいり、協同組合の代表者の下で必要な「追放」が行われるように、たえず注意がはらわれた。

現物課税に関する演説から二年後の一九二三年五月、新経済政策の高潮期にレーニンは、協同組合制度についての彼の大論文で、この政策に理論的基礎を与えた。「われわれは新経済政策に移ったとき」と彼はいった、「協同組合制度について考えることを忘れた点で軽率であった。」ところがいまや彼は協同組合を過渡期の国家経済のなかにすえつけられる一要素と認めるのでは決して満足しない。協同組合は突然に社会主義的新秩序の中心にはいりこんでくる。いまやレーニンは人民を協同組合に抱え込むことをもって「われわれに残された唯一の課題」とよんでいる。ロシアの協同組合化が彼の眼に「莫大な」、「巨大な」、「無限の」意味をもつことになった。「それは」と彼はいっている、「まだ社会主義社会の建設ではないが、社会主義社会の建設にとって必要かつ十分なすべてである。」それだけではない。協同組合は彼にとつてたんに社会建設の前提であるだけでなく、さらにまさしくその中核となったのである。「ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの勝利に基づき」と彼は説明している、「生産手段を共有する、開化した協同組合から成る社会秩序——これこそは社会主義的社会秩序である。」そして次のように結論する。「協同組合のたんなる発展もわれわれには社会主義的發展と同じように重要である。」そればかりか、「完全な協同組合化の条件の下では、すでにわれわれは両足で社会主義の地面に立つものである。」彼は、計画中の全包括的な国营協同組合のうちに、「ロバート・オウエン」ともにはじまった「古くからの協同組合の「夢」を見ているのである。ここで理念と現実との間の矛盾が最高点に達する。ロバート・オウエン」ともにはじまる「ユートピスト」たちが、彼らの組合思想や計画について問題にしたことは、生活と労働とを共に

する小さな独立的単位への人びとの自発的な結合とそれら単位の諸共同体の共同体への自発的結合とであった。レーニンがかかる思想および計画の実現として示しているのは、これと全く逆のものであり、国营生産所と国营配給所の巨大な、嚴重に中央集権化された複合体、たがいに歯車のようにかみ合わされ、官僚制的に管理された生産および消費の機関から成るメカニズムである。自発性や自由な結合などもはや存在する余地がなく、それを夢見る可能性すらもない。——夢の「実現」とともに彼は夢見ることをやめた。ともあれ、協同組合制度を国家のなかに組み入れようとするレーニンの考えは、このようなものであった。そして彼は死の八ヶ月前の、他の点でも影響するところのきわめて大きい論文においても、この考えを捨てなかった。彼は、あらゆる領域に中央集権主義の縮小をもたらし、その絶頂に達していたところの運動に決定的な理論的基礎を与えようと欲した。しかし彼はこの運動に土台中の土台たる自由の原理を与えなかった。——そしてこれは彼の一連の思想からすれば必然的なことであった。

多くの人びとは、このレーニンのかくも強調した協同組合制度への傾きのうちに、ロシアの民衆主義者たちの思想への接近を見ようとした。民衆主義者たちにとっては、民衆のうちになお生きており、あるいはそこに新たに形成されつつある協同組合的結合の形態こそは将来の社会秩序の萌芽であり核心であった。そしてレーニンはこれらの人びとのかくも長い間闘ってきたのである。類似はたんに表面的なものでしかない。レーニンはいまま協同組合を自発的な、

独立した、内的動因からまた自己の法則にしたがって発展する構成体としては片時も考えなかった。国民を一つの統一的な、献身的意志をもって彼にしたがう全体にまで形成するためのあらゆる困難な努力の後で、「官僚制の瘤」と病気の徴候や死の接近についてのあらゆる失望幻滅の後で、いま彼が熱望したことは、結合されるべくもない二つのもの、すべてにおおいかぶさる国家と血気さかんな協同組合、すなわち強制と自由とを結び合せることであった。人間歴史のあらゆる時代を通じて、つねに協同組合とその原型は国家とその原型の有効権力が残しておく隙間においてのみ真に発展することができた。隙間のない国家はその本質上協同組合の現実の発展を排除するのである。レーニンの最後の理念は、協同組合が、ただ機能上国家から区別され、実質的には国家と合致するように、その範囲を拡大し、その構成を統一することであった。それはとうてい不可能なことである。

スターリンは、一九二一年から一九二三年におけるレーニンの協同組合観の変化を、国家資本主義がまさに望ましい程度の地歩を占めなかったこと、また一千万の組合員を擁する協同組合が新しく発展した社会主義的産業と緊密に結合しはじめたことをもって説明した。これはたしかに大体レーニンの現実的動機を指摘してはいるが、しかし彼の上に突然よみがえった協同組合熱を説明するには足りない。それどころかいまやレーニンは協同組合原理のうちに、彼にとってかくも仕末の悪い官僚制への対抗策を認めたことは明らかである。しかし協同組合は、

その最初の自由な形態においてのみ、そのような対抗策たりえたであろうが、全く「巨大な」官僚制に頼るレーニンの強制的形態ではそれは不可能であったろう。

明らかにレーニンの強制理念は、すでに述べたように完全には実施されはしなかった。ついで逆の動きが一九二四年五月、初めは完全市民すなわち有権者だけに自由加入を復活するようになり、一九二八年初めには農村の消費協同組合においても、権利に制限はあったが、他の者にも行われるようになった。一九二三年末、消費協同組合連合会の理事会はこう説明した。「われわれは、自由加入への転換がもっと早く行われなければならなかったことを告白しなければならぬ。われわれはもっとしっかりした土台に立ってこの危機に対処する能力がなかったのである。」間接の強制はたしかに依然として協同組合に対する優先的な支給を通して行われている。一九二五年労働組合中央評議会の当時の議長の間から、補助や貸付を行うさい、協同組合への加入がほとんど強制的に考慮されることを聞かされる。それから十年後には、すでに長い間国家の干渉にさんざん苦しまなければならなかった都市の協同組合が六五四都市で一挙に廃止されたのである。

はしなかったかを示すに十分であろう。これをいくらか補うものとして、一九二六年ないし一九三一年の五ヶ年計画中の農民集団化にたいする態度の変化があげられるかも知れない。私ここでは若干の特色のある布告や出来事を時期を追ってあげることで満足しよう。一九二七年末モロトフは、農業の後れを指摘し、それを克服するため、欠陥はあるが有益な農村共同経営を一般の工業化計画に結びつけて発展させることを求めた。一九二八年六月にスターリンは現在の共同経営を一層強度に拡張した新らしく設立することの必要を説いた。一九二九年四月の党大会では、五ヶ年計画の最中であつたが、個人経済にたいする対抗策として社会化された生産領域を形成するスローガンが発表された。集団化の方策は間もなく多少明白な強制的形をとり、初めは非常に効果的であるように見えたため、スターリンはその年の末にこう言明した。「集団化運動がこのような度合で進展したならば、都市と農村との対立は速かなテンポで一掃されるであろう。」一九三〇年初め党中央委員会は、計画で予想したテンポが突破されたことを確認し、そして運動の速度を鈍らせようとする一切の企てにたいし断固たる闘いを行う必要を極度に強調した。三ヶ年のうちに、「ある槓杆に支えられた」説得手段で、完全な集団化が遂行されるはずであった。各地区の執行委員会はその純行政的方策の徹底さを互いに競争した。地区が「完全な集団化の地域」と言明されたことも稀ではなかった。だが集団経済（集団農場）の数の著しい増加からえられた、決定的成果の印象が偽であつたことが、ほどなくして

ることなどできるか。」いいかえれば集団農場化に賛成しない者は、ソヴェト制度に反対する者だということである。大会はこの態度を確認した。つづく数年の間は、食糧危機が誘発した緩和のあとで新たな厳しい方策がとられ、一九三六年までに農民の約九〇%が集団化されたが、しかしそのうち完全なコミュニオンはごく僅かであり、しかもだんだんに消滅して行った。

古い農村ロシアは、メイナードが正しく述べているように、一九二九年まで存在した。それが伝統的農耕方式といっしょに抹殺されたことは、経済的能率の視点から肯定されるにすぎない。社会構造の視点からするならば、問題は一般に別の形で提起されなければならない。この視点から見ると、問題はあれかこれかであることは許されない。なすべき任務は、現存の構造単位を新しい条件と要求とに対応しうるように改変し、しかもそのさい、構造的な性格、独立の細胞としての本質を維持することであった。こうした任務は遂行されなかった。なるほど正当に、合理化された大規模の農耕形態、農業の工業化および技術化と結びついたマルクス主義の思想が、農民を共同耕作に慣らしてきた古いロシア村落共同体に接木されたということができよう。だが農業を工業の一部門とし、農民をこの工業の賃銀労働者たらしめようという政治的動機に発する傾向、すべてを包括し、すべてを規制する国家経済を旨とする傾向、農業協同組合をたんに完全コミュニオンへの過渡的段階とし、完全コミュニオンをたんに全体的国家工場の農業部門の地域的分岐への過渡的段階と見なす傾向、それらの傾向は村落共同体の固有の価値、構

証明された。農民は、家畜の屠殺から蜂起にいたる独特の仕方でも反応し、また大農清算のためにとられた方策も弊害を除去しなかったし、中農もしばしば力を合せ、さらに農民の子弟を含む赤衛軍さえも不満の念にとらえられた。そこでスターリンは有名な論文『幻惑的成功』で必然的と見える転換を行った。集団化政策は、と彼は説明した、レーニンの説によれば自発的活動に基づくのである。「われわれは力づくで集団経済をつくりあげることができない。それは愚かな、反動的なことであろう。」レーニンはまた「法令によって共同耕作を導きいれようと企てるのはこの上もなくばかげている」ことを教えた。だが自発性の原則は傷つけられ、活動のテンポが発展のテンポに相応しなかったし、完全な村落コミュニオンにいたる途中の必然的な中間の段階がとびこされた。中央委員会は強制的な方法を止めるよう命じた。七月に党大会は、集団経済は自由加入の原則の上でのみ建設されうるものであり、強力もしくは行政的強制を用いる一切の企ては「党の方針にたいする違背であり、権力の濫用」であると声明した。その秋農業人民委員会は再び「集団経済とその成員にたいして用いられた粗暴な超行政的方法」を批判した。ところがそれから五ヶ月足らずして、自由の増大に伴う現象としてかなり多数の農民が、集団農場に新たに与えられた特典にもかかわらず、集団農場を離脱することがあったのち、同じ人民委員会はソヴェト大会への報告において、集団農場化運動に参加しなかった小中農についてこう述べた。「彼らは誰に味方するのか、クラークにか、集団農場にか。……いま中立であ

造的価値を窒息させたし、また窒息させざるをえなかった。人は、個々の有機体の場合と同じように、社会有機体においても、それを余すところなくかつ全能の力をもって目的のための手段として利用するとき、その生命の真髄を奪い去らざるをえないのである。「レーニズムの見地からすれば」とスターリンは一九三三年にいった、「集団経済は、ソヴェトと同様に、組織形態として見れば一つの武器、しかも唯一の武器である。」人は杖につくってしまつた小木から葉が出ることもしくはや当然に期待できない。

ロシアの民衆の間には、他のいずれの国におけるよりも久しい前から、共同作業のために小さな組を結成する「中世的」傾向が維持されてきた。この傾向から生れた最も独特な社会構成体すなわちアルテルについて、クロポトキンは四十年前に、それがロシア農民生活の本来的実質をなしていること、すなわち漁民や獵師、職人や小商人、運送人やシベリア流刑者、織工や大工として町へ働きに行く農民、農村において共同で、ただし共同所有と個人所有とを厳密にわけて、耕作や畜産に従事する農民等の、一部は永続的な一部は一時的な、結果をなしていることを語る⁽¹⁵⁾ことができた。ここに構造的再建の偉大な理念にとつて他に類のないほど価値ある構造的要素が存在したのである。ボルシェヴィキ革命はそれをそれ自体として活用しなかつた。それは独立の小さな共同体などには何の用もなかつたのである。それはコルホーズの形の下に、スターリンがいったように「当分は」経済的理由から農業アルテルを優遇したが、しか

し当然のことながらそれを過渡的なものとしか見なかつた。最も優秀な農業理論家の一人はその目標をこう規定した。土地の耕作は、と彼はいった、国家経済がすべての農業アルテルにとつて代り、土地、生産手段および家畜もまた中央集権国家の所有に帰するとき、初めて社会化されたと見なされるであろう。そのとき農民は、国家の賃銀労働者として共同家屋に、広く電化された地域の中心たる大農業都市に居住することになるであろう。このような観念を一部に含む願望像は、決定的にかつ残りなく非構造化された社会の像である。それどころかそれは社会を食いつくした国家の像である。

ソヴェト制度は、経済技術的には大きな成果をあげたし、戦争技術的には一層大きなことを成しとげた。市民は概して種々の理由からこの制度を消極的または積極的に、擬制的または現実的に肯定しているように見える。彼らの態度のうちには、見たところ、漠然とした諦めと実際の信頼とがいろいろまじっている。個人は思想と行動のわずかな自由しか保証しないこの制度に自己を任せている、と一般にはおそらくいうことができるであろう。どのような逆戻りも存在しないし、また少くとも技術的能率においては進歩が存在するからである。しかしソヴェト制度が社会主義について実現したことを、囚われない眼で見る者には、これとちがった光景が見えてくる。社会主義への要請は多いけれども、社会主義の形態は皆無なのである。「共産党宣言が語るかの『組合』はどのように見えるのか」と偉大な社会学者マックス・ウェーバーは一

九一八年に質問した。「社会主義は、ひとたび権力を奪取し、それをいまや意のままに駆使するチャンスを実際に掌握したとき、社会主義社会の胚種細胞としてとくに示す何をもっているのか。」このチャンスが社会主義の手にはいった農村では、今日もはや他のいかなる場所にも存在しないところの胚種細胞が存在していたのに、それは成長せしめられなかったのである。それにしてはなお転回と変化の時機は存在する。——ただしそれはレーニンや彼の協力者がしばしば実行したような戦術的意味のものではなく、原則的意味でのことである。逆戻りすることはできない。ただ前方に——しかも新しい方向に前進しうるのみである。突然に出現してこの変化を成就するような名もない力がなお奥深く活動しているかどうか、それにこそ多くのことがかかっている。社会主義という言葉を最初に用いたピエール・ルルー(サン・シモン派社会主義者一七九七—一八七一年)は、一八四八年フランスの国民議会で次のように演説した。「諸君がいかなる人間的組合をも欲しないならば、あえていうが、諸君は文明を恐ろしい苦悶のうちに死滅すべき運命にさらしているのである。」